

モンゴル外交私記―北東アジアの中の日本とモンゴル（連載第4回）

元在モンゴル日本国大使

元 NEANET 会長

花田 磨公

4. 中ソ対立の中のモンゴルと私（1）

私は60年安保を大学2年のとき経験しました。クラスが20名たらずの少数で同士の雰囲気がありましたし、先輩の強烈な勧誘もあり安保デモも大きなデモに3、4回全員で参加していました。中小企業の社長の子息や空手部の俊秀、タンゴ、ダンスに熱中しているおしゃれさんなど、デモにそぐわない級友もおりましたが、全員でデモに参加していました。デモ先で雨にふられ雨宿りしたら、中学以来の生涯の親友のご両親がデモに参加していて、先着で雨宿りしていたり、家庭教師先で小6の社長令嬢が四つん這いになりテレビを覗きこんでいるのでたずねると、「先生（筆者のこと）がどこかにいるかもと探していた」というので「ここだよ」とかいうこともあり、その時代とともに安保は実在した生活でした。外務省に採用された後も、外務省にデモが押しかけると崎山さんにお前あそこに行きたいだろうと、からかわれたりしていました。今振り返ると、歌声喫茶にいったり安保はある意味青春でした。明るい活力のある時代だったと思います。

モンゴルがそもそも社会主義国であり、社会主義の理論には興味がありました。でも、社会主義国の現実も少しずつ漏れてきていましたので、日本が社会主義になってほしいと具体的に思ったことはありません。当時若干でも、ものを考える青年はみな、社会主義に興味をもったものです。有名大学の経済学部は「マル経」とよばれた社会主義理論によるマルクス主義経済学と「近経」とよばれた近代経済学の二つがあり、どちらもそれぞれ人気があって拮抗していました。当時坊ちゃん大学と言われた学校でも半分はマルクス経済学を教えていました。当時の他大学に入った友人から得た情報では、近経はアメリカのサムエルソンの書いた教科書を使い、ケインズを神様とした経済学で今日の経済学はこの流れだということでした。もっともマルクス経済学も近代経済学で、古代や現代のものではないと思いました。

マル経では労働の質は問わずそれは捨象して、労働時間をもとにして理論をたてていくし、近経では欲望に基礎をおき、同じビールが最初の一杯に高価値を認め、次第に価値が低減していくとしていて、どちらも経済学なのにスタートが異なり、しかも、理論上抽象的なものに基礎をおいたり、あまり学問的といえない感覚に基礎をおいたりして、私はどちらも科学的でないと思い、微妙に信頼しがたいものを感じとっていました。きっと私の浅薄な理解で誤解とは思いますが。

しかし、政治理論となると話は別で、私は社会主義理論に興味をもちました。とくに民族解放の理論は秀逸でしたが、現実には社会主義国が少数民族を圧迫し放題だったり、民主主義がなかったり、大きく違いました。特にモンゴル民族やチベット族が社会主義国で圧迫されているのを見て幻滅し

ました。

けれどもとにかくモンゴルが社会主義国である以上、本気でモンゴルをやるなら社会主義理論の学習は必須と思いました。独学でしたので充分とは言えませんでした、のちのち仕事上は役立ちました。私はマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの本ばかりでなく、中国の毛沢東の本も多少読みました。中国語私塾の長谷川良一先生に人民日報の記事の8割が理解できるよとして暗記させられた毛沢東の『關於正確處理人民内部矛盾問題』は瀋陽総領事のとき大いに活用いたしました。全文は忘れましたが、前文や部分部分いまでも暗記しています。こちらの言い分を、毛沢東流に主張すると、今時そんなことというのは中国広しといえど花田さんだけだと言われ、でも笑って日本側の言い分を通していただいたこともありました。邪道なやり方ですが役立ちました。そして、中国とソ連（ロシアのこと以降ソ連と表記）の社会主義理論の指導権争いをフォローすることは私にとってわくわくする知的ゲームでした。知的青春だったと思います。

民族問題に関するレーニンやスターリンの文献を読む勉強会が学生時代にモンゴル語の先輩に組織され閉口しました。ロシア語文法も知らないのに、外語大学に入ったのだから文法などなんとかなる、頭から辞書引いて一晩で理解してこいと言われ、先輩離れをしました。でも、そのあと日ソ学院に土日に通い中級までロシア語を学びました。中途半端でしたが、のちにオムスクの空港で家族やアラスカ大学の米国人教授のために飲食を注文するのに役立ちました。崎山さんとモンゴルに出張したとき、アエロフロート機内でロシア語が理解できない者は手を上げるとロシア語でシュワーズグッドがいましたら、崎山さんがはいと言って手を上げられたのには笑いました。ロシア語がわかるから手を上げられるわけですから。彼女がそばにきて英語で懇切丁寧に説明してくれました。私はといえば、乏しいロシア語知識でしたが、神田のナウカでモンゴル関係のロシア文書籍を買って、大事な文献を辞書を引き四苦八苦して内容を把握していました。中国語書籍については長谷川先生のおかげでロシア語よりは楽に読めていたので、語学学習で出入りしていた神田の内山書店でつけて買っていました。でもおおかた積ん読でしたが。

当初の執務作業のもう一つは、社会主義国（当時は共産圏と呼称）内部で進行中の中国とソ連（現ロシア）の対立の中におけるモンゴルの情勢把握でした。「中ソ対立」では外部からはうかがい知ることができない状況のなか、少しずつ情報が漏れて来て、やがて全体像が見えるようになった社会主義国内部の理論闘争と国家間の関係にまで発展したその影響が問題でした。

ウネン紙などモンゴル紙誌をフォローしていましたので、こちらはもっぱら私の専管事項でした。中国課調査班には東大出の極めて優秀な中国問題専門家が特別研究員として執務されていて、中ソ対立を含む素晴らしい情勢分析をされていました。その方はやはり社会でも大成され、地方国立大学の学長も務められました。私はモンゴル担当でしたので、課内の中ソ関係の詳しい内容に立ち入ることはできませんでしたが、アウトプットされたその方の公的な成果には目を見張るものがあり、勉強になりました。しかしながら、中ソ対立はモンゴルという社会主義国を専門とする私自身の問題であることには変わりなく、私的な研鑽と努力により分析を継続せねばなりません。関係資料はモンゴルの新聞雑誌以外なものもなかったのですが、学生時代からの興味が幸いして、中ソ関

係の文献や資料を多少は自宅にため込んでいましたので助かりました。

当時社会主義兄弟党が中ソ両党の論争に割って入ることはあまりなかったし、むしろ関心は国家関係でした。

モンゴルはソ連の庇護のもとに1921年ソ連について二番目の社会主義国として独立を獲得し、徐々に独立のレベルを上げていきました。1949年中華人民共和国が成立して南北国境はともに社会主義国となり、順風満帆で国の発展を図れたと思われるかもしれませんが、そしてそう考えて失望したモンゴルの外務大臣やモンゴル国民の方もおられました。決してそうはいかなかったのです。しかしながら、モンゴルのリーダーは中ソのモンゴルへの援助を巧みに引き出し、中ソ対立の始まる頃には援助競争の様相さえつくりあげることができました。一種の生きる術と言えるかも知れません。

後にロシア一辺倒になったモンゴルの姿を見て、モンゴルは中ソ対立がはじまり、文句なくロシアに着いたと思われる向きもあろうかと思いますが、必ずしもそうでなく、中国とやっていきたいという勢力もありました。満洲国は日本の傀儡国家として非難されてはいますが、ロシアの支配から逃れ独立するために満洲国や、その背後にある日本の力を宛にするのを考えた人たちもいたと軍人の高官を含む市井の方々から聞いたことが何度かありました。したがってモンゴルとしてはどちらか片方を選択することは国益に沿わないことであつたらうと考えられます。その選択が迫られているモンゴルの現状を当時、ウネン紙を中心とするモンゴル紙からのみ、固唾をのんで読み進めていましたが、その熱中度はほとんど趣味の世界だったと今自分でも苦笑しております。そのため外務省最初の2年は前回のべたようにモンゴル月報編集などで手一杯だったのに、さらに手のかかる仕事を時代が与えてくれたと今思います。

後にJICAの総裁になられた藤田総務班長、そして総務班におられた田島元カナダ大使のお二人の上司に一夜、お二人の母校東大の衛藤藩吉教授に紹介かたがた、中ソ対立の中のモンゴル情勢について説明せよということで一夜銀座におつれいただきました。当時中国やソ連とは異なり何の情報も入らない得たいの知れない国、モンゴルに関して、その他の社会主義兄弟諸国とそれほど遜色のない情報をモンゴル紙から収集できていたのではと今評価できるほどでしたので、大変感心され、東大にもモンゴル研究を創設したいと仰せでした。衛藤先生はこれでご縁で生前多少のお付き合いをいただきました。また在香港総領事館時代に先生はお見えになり、お目にかかりました。お名前にもあるように瀋陽生まれの先生は後に、私の瀋陽総領事時代に瀋陽会の会長として会員を大勢つれて2回お見えになり、久闊を叙しました。

1958年にモンゴル人民革命党書記長に再選されたツェデンバル首相は、その妻がロシア人であったことなどから当初よりロシア寄りと目されていました。しかし、その彼も当初は旗幟鮮明にせず、微妙でした。モンゴル及びその指導者にたいする数数の高圧的なソ連の態度があつたことは文献に記されています。ですからモンゴル指導者であれば、誰しもソ連のいいなりにできたらなりたくなかつたと思っています。そのような奴隷的屈辱の状態からなんとか離脱したいと思つたに違いないと思います。ツェデンバル首相の生れ故郷のオブス県ダブス村はソ連領に吸収されており、1977年

に首相が故郷訪問したときはソ連要人が同行してビザ問題を処理したと言われるなど、首相の心中察するにあまりあり、私は彼も愛国者にちがいないと認め同情していました。

1961年の7月に開催された第14期党大会で、第3次5ヵ年計画が採択されましたが、中国に比しソ連の援助約束が圧倒しました。1960年から61年までに表明されたソ連の援助は350百万ドルであったのに対し、中国は50百万ドルでした。1958年から1961年まで進めた大躍進政策の失敗により餓死者が大勢でいたなかで、中国はモンゴルを援助していたとの説明が大方ですが、私は別の見方をしていました。

長谷川先生に中国語を学ぶ仲間が3名ほどになった頃は神田の内山書店の店先をかりて勉強していました。まったくの政治性がなかったので外務省勤務のかたわらプライベートで楽しく学習していました。その頃、一人の女性が店に身を寄せていたので話しを聞いてなるほどと理解しました。東北から帰国したそうで、そのころモンゴル援助の労働者が大規模に募集され、まわりは、食料があるというだけで大勢モンゴルに行ったと言いました。中国の労働援助は大躍進の尻ぬぐいの面もあったと理解しています。

モンゴルには最盛期 12000 人の援助労働者が中国から来て、ウランバートル・ホテルはじめ現在の平和通り両サイドのビル群を建設したり、平和橋の架設や道路工事をしました。ちなみに今再開発されていますが、旧ウランバートル市は日本人捕虜が最初に 1945 年から 47 年にかけて建設し、58 年以降中国人労働者により建設されたといっても過言でないと言えます。